

複数のコース・類型と、小・中学校と連携した 探究学習により、多様な生徒のニーズに応える 大分県立安心院高校

大分県立安心院高校は安心院・院内地域唯一の高校として、多様な生徒のニーズに応えながら、希望進路の実現を支援するため、4コース6類型を設置。校内人事を工夫して、少人数のきめ細かな指導を行っている。また、地域の小・中学校と連携した探究学習「地球未来科」を推進。12年間を見通した資質・能力の育成に取り組んでいる。

教育課程 概要
学年による教育課程の区分：あり（学年制）
学科・コース：普通科（2年次より4コース6類型に分かれる）
卒業までの履修単位数：96単位
各年次の履修単位数：1～3年次各32単位
選択科目数：46科目（うち専門科目25科目、学校設定科目3科目）
各年次の選択可能な選択科目数：2年次11科目（6単位）、3年次11科目（6単位）
特徴ある教科・科目：学校設定教科・科目3科目
指定校等：2000～23年度研究開発学校、24年度～DXハイスクール採択校、24年度～三菱みらい育成財団助成事業採択校

教育課程 編成の背景・特徴

安心院・院内地域唯一の高校として
生徒の多様なニーズに応える

「豊かな自然や農業遺産などの資源を生かし、小・中・高を見通した系統的な学びを通して、郷土を愛し、地域社会の一員として高い志を持ち、地域課題の解決を図るために主体的に考え、行動できる力を育成する」ことをスクール・ミッションに掲げる大分県立安心院高校。その使命の下、同校では卒業までに育てたい力を明確化し、その育成のための手段として、多様な学びを実現するコース制を採用。さらに、小・中学校と連携し、小・中・高の12年間を系統立てた探究学習のカリキュラムを展開している（P.20図1）。

同校の教育の土台になっているのは「地域の子どもたちは地域で育てる」という思いだ。大分県宇佐市北部に位置する安心院・院内地域にある唯一の高校の同校に入学する生徒の大半は、地域の中学校の出身だ。生徒たちの希望進路は、難関国立大学から地元での就職までと、極めて幅広い。

地域の高校として、そうした多様な希望進路に柔軟に対応するため、同校は普通科内に専門コースを1993年度から設置。現在は、主に進学を希望する生徒を対象とする一般コース（文系・理系）のほか、園芸マネージメントコース、食文化コース、情報コース（情報会計・情報技術）の4コース6類型がある（P.20図2）。また、同校は2000年度に、学習

学校概要

設立 1946（昭和21）年
形態 全日制/普通科/共学
生徒数 1学年約65人
2024年度卒業生進路実績 国公立大は、福岡教育大、長崎大、鹿児島大、長崎県立大、大分県立看護科学大に5人が合格。私立大は、北海道情報大、大谷大、九州国際大、九州産業大、久留米大、福岡大、別府大などに延べ10人が合格。短大・専門学校進学24人。就職8人。

指導要領等の基準によらない教育課程を編成するなど、新しい教育課程や指導方法等について開発する「研究開発学校」に文部科学省から指定され、全国で2番目となる連携型中高一貫校となった。10年度からは小中高一貫教育に係る教育課程の研究を開始。さらに



主幹教諭
吉田 朋子
よしだ・ともこ
同校に赴任して10年目。
理科（生物）。



教頭
工藤 知子
くどう・ともこ
同校に赴任して2年目。



校長
佐藤 茂
さいとう・しげる
同校に赴任して13年目。

図1 卒業までに育てたい力と、その育成のための学びのあり方

グラデュエーション・ポリシー (卒業までに育てたい力)

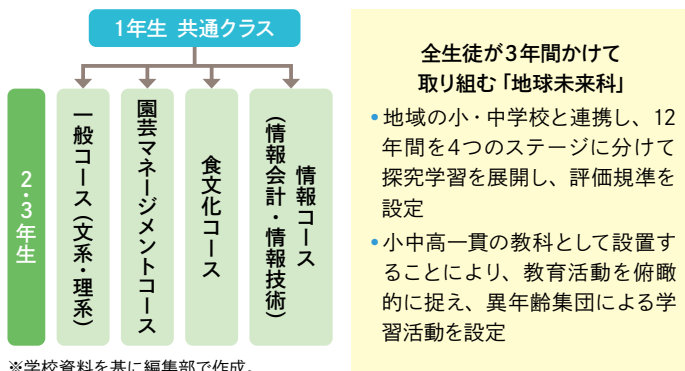
- ①物事を多面的・多角的に捉え、自ら課題を発見し、解決に向けて粘り強く取り組む力
- ②人間性豊かな広い心を持ち、多様な人々と協働できる力
- ③目標を持ち、その実現に向け主体的に行動できる力

カリキュラム・ポリシー (その育成のための学びのあり方)

- ①4コース6類型による、生徒の興味・関心、進路希望に応じた個別最適な学び
- ②多面的・多角的に物事を捉え思考するため、小・中学校や地元の企業、大学等と連携した異年齢の多様な他者との協働的な学び
- ③総合的な探究の時間「地球未来科」において、国際的視野で地域課題を思いだし解決する力を身につける小・中・高12年間での系統的な学びや、「発酵・醸造」を通じた研究・創造性を深める学び

※学校資料を基に編集部で作成。

図2 普通科に設置した4コース6類型と「地球未来科」



※学校資料を基に編集部で作成。

教育課程 運用の工夫

2年次から

希望のコース・類型を選択

同校の生徒は、1年次は共通クラスに所属し、2年次から希望進路を踏まえてコースや類型を選択する。専門教育に関する教科は「農業」「工業」「商業」「家庭」が設置され、生徒は自分が選択したコース・類型に応じて専門科目から22単位以上履修する。それにより、大学入試における専門学科・総合学科

卒業生特別選抜の受験資格が得られるため、一般コース以外の生徒にも大学の機会が確保される。

同校は生徒数の減少により、14年度に定員を120人から80人に削減して1学年2学級となったが、現在まで、各学年はいずれも3クラス編成(一般コースのクラスが1クラス、園芸マネジメント、食文化、情報の3コースの生徒が混在するクラスが2クラス)を維持している。それも同校の魅力の1つであると、佐藤校長は説明する。

「3クラス編成は、担任業務と分掌業務を兼務するなど、校内人事を工夫することで実現しています。生徒の学力も希望進路も多様だからこそ、生徒一人ひとりに目が行き届くよう、1クラス20人程度にしてきめ細かな指導を行っています」

資質・能力の育成計画を小・中学校と共有

コース・類型を問わず、全生徒が小・高12年間を通して取り組む探究学習が「地球未来科」だ。ここでは、小学1年生から高校3年生までの12年間を4つのステージに分け、発達段階に応じた系統的な学びを構築。「国際的な視野で地域を捉える力」「地域の課

題を国際的な視野で解決する力」「英語をツールとしたコミュニケーション力」の3つの資質・能力の育成を目指し、小・中学校では生活科や「総合的な学習の時間」、高校では「総合的な探究の時間」で探究学習が行われる。そして、小・中・高の教師が評価規準(図3)を共有し、地域資源を生かした教材を協働開発している。

高校3年間における「地球未来科」の取り組みの概要は次の通りだ。まず、生徒は地域の特産品であるブドウの歴史や文化、栽培技術などを学んだ上で、地元企業の見学や体験を通して発酵や醸造の仕組みを理解する。その後、廃棄される農作物に新しい価値を付加して再生する「アップサイクル製品」の提案や、地域資源を題材にした外国人向けの英語ツアーの企画・実施などに取り組む。3年次には、個人研究の成果を1・2年生も参加する「地球未来科発表会」で発表し、論文にまとめる。

「3年次の10月に実施される地球未来科発表会において、生徒は連携協定を結んでいる大学の教授から指導・助言を受け、最終論文の作成へと進みます。生徒の研究テーマは多岐にわたりますが、総合型選抜の志望理由書の作成などに生かし、希望進路を実現する生徒が少なくありません」(工藤知子

生徒の可能性を開花させる教育課程の柔軟化 —何ができるのか？ どう実現するのか？

図3 小中高一貫教育「地球未来科」で育む資質・能力(抜粋)

段階		小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3
		キーステージ3			キーステージ4			
視点		学ぶ方法や探究的な態度を育成する充実期			論理的な思考力・表現力や課題解決能力を育成する発展期			
つきたい力・視点		身近な地域と他の地域			世界の中の両院			
		具体的につきたい力～何ができるようになるか (地球未来科で目指す各段階での具体的児童・生徒の姿)						
捉える(かかわる)力	1	<ul style="list-style-type: none"> 身近なひと・もの・ことと広い視野で向き合い、課題意識を持って自分なりの工夫をしながら繰り返し活動し、解決のために積極的に取り組もうとする。 			<ul style="list-style-type: none"> 世界の中の両院の視点から、設定した課題を解決するための方法を工夫し、主体的、積極的に課題解決のために考えたり、社会参画したりしようとする。 			
		<ul style="list-style-type: none"> 活動内容を自分なりに広げたり、深めたりしながら、他者や地域社会とともに学んだことを実践していこうとする。 			<ul style="list-style-type: none"> 世界の中の両院の視点を持って広い視野で身近な問題と向き合い、解決策を発信し、実社会の問題解決に取り組む(社会参画)。 			
	2	<ul style="list-style-type: none"> 友だちや地域の人・関係機関と力を合わせて協働する大切さに気づき、問題の解決に向けての取り組みを成し遂げる喜びを感じる。 			<ul style="list-style-type: none"> グループや地域の人、関係機関等とつながりを深め、協力して課題解決のための案を練ったり、積極的に活動したりする。 			
		<ul style="list-style-type: none"> 他者のよさを認め、外国の人を含めて異なる他者を受け入れながら取り組むことができる。 			<ul style="list-style-type: none"> 他者のよさや違いを認め、伝え合ったり、活動を通して出合った外国の文化や習慣の違い等を尊重したりすることができる。 			
3	自己理解	<ul style="list-style-type: none"> 振り返りを通して、自分の特徴や可能性に気づき、それを発揮するとともに、将来の生き方につなごうとする。 		<ul style="list-style-type: none"> 振り返りを通して身についた力を自覚することで、自分の可能性に気づき、進路選択等の将来の生き方につなごうとする。 				
4	課題の捉え 事実に知識・概念		<ul style="list-style-type: none"> 地域の自然・文化・産業等の価値を探るとともに、他地域との違いから、解決すべき課題を見つける。 			<ul style="list-style-type: none"> 世界の諸地域との比較や社会の変化に目を向け、地域の特性を考察することにより、地域の価値や解決すべき課題を見つける。 		

小学1年生から高校3年生までの12年間で4つのステージに分けて、それぞれにおける「捉える(かかわる)力」「解決する力」「英語をツールとしたコミュニケーション力」の具体的な姿を評価規準として記述し、校種を超えて共有している。
※学校資料を基に編集部で作成。

教師
「地球未来科」での探究学習を通して身につけた資質・能力を各教科で発揮する場の1つが、同校の生徒が教師役となって地域の小学生に教える

「ST(スチューデント・ティーチャー)活動」だ。それは各教科の単元計画の中に位置づけられた学習活動であり、全教科での実施が推奨されている。
「例えば「生物基礎」では、めだか

の観察や光学顕微鏡を使って生き物の観察に取り組んだり、『調理』では、郷土の菓子づくりに取り組んだりしました。過疎化が進んで子ども的人数が少なくなっている今、年齢や校種を超えて他者とながら、学び合う機会をつくることは、高校生にとっても主体的な学びの醸成につながっています」
(主幹教諭・吉田朋子先生)

既に同校の生徒から教わった経験を持つ小学生が同校に入学し、高校生としてST活動に取り組むという、人材育成の好循環が地域に生まれている。

成果と課題

校長には学校ビジョンを
明言することが求められる

4コース6類型による学びや少人数制によるきめ細かな指導を通して、多様な生徒のニーズに対応するとともに、「地球未来科」の取り組みを通して資質・能力を育成している同校。その成果は、生徒の学校生活に対する満足度から見て取れる。25年度11月に実施した全生徒対象のアンケートでは、93%を超える生徒が「学校生活全般に満足している」と回答。3年生に限れば、その割合はほぼ100%に達する。
「地球未来科」がスタートして10年

が経った。その間、同校はもちろん、連携する地域の小・中学校でも多くの教師の異動があったが、そうした中でも取り組みが形骸化しなかったのは、小・中・高それぞれの管理職が取り組みの意義を理解し、学校全体を牽引してきたからだ(佐藤校長は語る)。

「小・中・高合同の教員研修会を年に2回、教頭・研究主任会を年8回、校長会議を年に6回と、頻りに校種間で目線合わせを行っています。形骸化を防ぐ上で最も大切なのは、管理職がビジョンを校内に浸透させることだと思っています。『偏差値で測れる学力も大事ですが、本校においては資質・能力をより重視し、「地球未来科」での育成に努めます』などと、私は機会がある度に先生方に、資質・能力ベースの教育の重要性を伝えていきます」
どのような学校をつくり、どのように生徒を育てたいかを言語化することが、管理職の役割として今後一層重要になると佐藤校長は考えている。

「未来の学校を語るために必要な教育的知見が誰よりも求められるのは、間違いなく校長です。教育課程のより一層の柔軟化が可能になると考えられる次期学習指導要領の実施に向けて、これからの数年間は校長の力量が大きく問われると思います」(佐藤校長)